

民進党、兩岸政策の「合意」論争

劉世忠

1 月末、台湾の最大野党である民主進歩党は全国代表大会を開き、「全民調（全体世論調査）」の方式によって2012年の総統選挙候補者を決定する規定を採択した。「レース」のルールが決まり、挑戦者はその中身に不満があろうとなかろうと、そのルールの上で作戦を練ることとなる。「全民調」という開放された世論調査の上では「反ブルー」や「反グリーン」といった分類は意味をなさず、現段階で世論の支持率が比較的高い、もしくは低い挑戦者に対する影響は異なるものになるであろう。このため、最近、民進党内でレースに参加しようとする挑戦者は、相次いで兩岸関係に関する自説を論じ、メディアの注目を集めようとしているようだ。

与党国民党の党首であり、かつ現在総統の地位にある馬英九氏は2月17日、米国の『ワシントン・ポスト』の単独取材を受け、再選への意欲を語った。事実上、馬氏は早い時期から民進党党内で兩岸政策に関する論争が展開されていることを耳にしており、そのために昨年12月の五大都市選挙後、即座に「九二合意」を俎上にあげて民進

党内の内紛を誘発させたのである。

まず馬氏は、民進党の蔡英文党首が以前に言及した「再び与党の座についての場合も、前政権の兩岸政策を継続する」との発言に対し、「継続する」という意味は、国民党が遂行する兩岸政策の「政治的基礎」である「九二合意」を継続するとの意味か否かはつきりさせるように求めた。続いて馬氏は、中国海協会の李垂飛・副会長が昨年8月に言及した「『九二合意』とは1992年に中国側の海協会と台湾側の海基会が口頭で合意した、兩岸はともに『一つの中国の原則』を堅持するというコンセンサスの表明」という発言や、2008年3月に行われた米国のブッシュ大統領（当時）と中国の胡錦濤国家主席の電話会談の中で胡錦濤氏が言及した「中国がこれまで一貫してとってきた態度は、台湾に対し『一つの中国の解釈はそれぞれが表す』ことを内容とした『九二合意』を基礎として新しい協商関係を築くことを希望するものだ」といった発言を引用して、「九二合意」を曲解し、米国や国民党、共産党の三方は受け入れているのに、民進党だけが受け入れを拒んでいるとして、民進

党の「孤立」を企図している。

さらに、馬氏のもう一つの政治的謀略は、兩岸関係というテーマを通じて民進党内の総統選挙への出馬を希望する挑戦者間の対中国政策上の差を際立たせ、民進党内の団結を切り裂こうとしているのだ。近頃の民進党のリーダー格の発言を聞いてみると、九二合意に対する考え方はバラバラで、馬氏の策略が成功したことを実証している。

呂秀蓮・前副総統は九二合意に替わるものとして「九六合意」なるものを持ち出した。「九六合意」が意図するものは、1996年に行われた台湾初の民選総統選挙が台湾の主権の現状を表しているとするものである。また、元行政院長で2008年の総統選挙の際、民進党の総統候補者であった謝長廷氏は従来から「憲法一中」説を整理し、自身の提案として「憲法各表（憲法を兩岸双方が解釈する）」という「重疊コンセンサス」を発表している。この二人は、現段階での世論調査では、かなり遅れを取っており、当然のことながら世間の耳目を集める主張をせざるをえないのだろう。

世論調査では比較的優位な立場に立っている蘇貞昌・元行政院長は、1999年に民進党が決議採択した「台湾前途決議文」を基礎とした「台湾合意」を

提案した。蘇氏は馬政府の頼幸媛・大陸委員会主任委員が昨年12月に言及した「頼七項」や馬氏が新年の祝辞で述べた「台湾の将来は台湾の国民によって決められなければならない」といった発言の事実を持ち出し、国民党の主張は民進党の主張に類似するものであり、「台湾共識」こそコンセンサスの主流である、と主張している。

そして民進党のリーダーを務める蔡英文党首は、前述の「前政権の政策を踏襲する」発言を除けば、党首という地位からいっても民進党内での候補者レースにはかなり優勢であるためか、大胆な提案に言及するところまではいっていないだろう。

中国海協会の陳雲林会長は1月、「大陸の対台湾経済政策には一つの政治的前提がある。それは、胡錦濤主席も発言したように『台湾独立反対』と『九二合意』である。もし将来、この2つの前提が崩れるようなことがあれば、すべての事柄を一から考え直さなければならない」と発言した。これは明らかに、中国政府も、民進党内部が「一つの中国」という枠組みの中で論争をするように仕向けたものに他ならない。

百家争鳴がお家芸の民進党とはいえ、兩岸政策については数多くの異なる意見が噴出しており、総統選挙候補

者選びという大レースに直面すれば、挑戦者間の主張はより一層激しくなるであろう。とはいえ、現時点では未だ党内での候補者選定段階に過ぎず、挑戦者は短期の利益に目をくらませて、急進的な政策を主張するべきでない。また、軽々しく国民党や共産党の口車に乗って「九二合意」の罠にはまることも慎んでいただきたい。現在の情勢から見て、レースで一步リードしている蘇・蔡の二人が危ない橋を渡らず、それを追う呂・謝の二人が世論調査の上昇を目論み、自分の主張をぶちまけるチャンスを虎視眈々と狙っている状態だ。

2012年の総統選挙において、確かに民進黨は対中国の有効な政策を打ち出す必要があるけれども、重要なのはスローガンよりもプロセスであり、内紛よりも団結こそが大切である。民進黨のリーダーたちは、今この時に「主張したいから主張する」ということが必要か否かを考慮するべきであるし、候補者選びのレースを意識するあまり大風呂敷を拡げてしまつては却つて民進黨の基本的な立場を失わせる危険性さえ孕んでいる。そうなると、もはや候補者として選ばれたとしても、その時にはすでに自分の播いた種にがんじ

がらめにされていることになりかねない。民進黨のリーダーたちは国内のコンセンサスを早急にまとめ、将来、政権を再び奪取した際に中国と対話するときの「新しい政治対話の基礎」を確立するべきである。**BT**